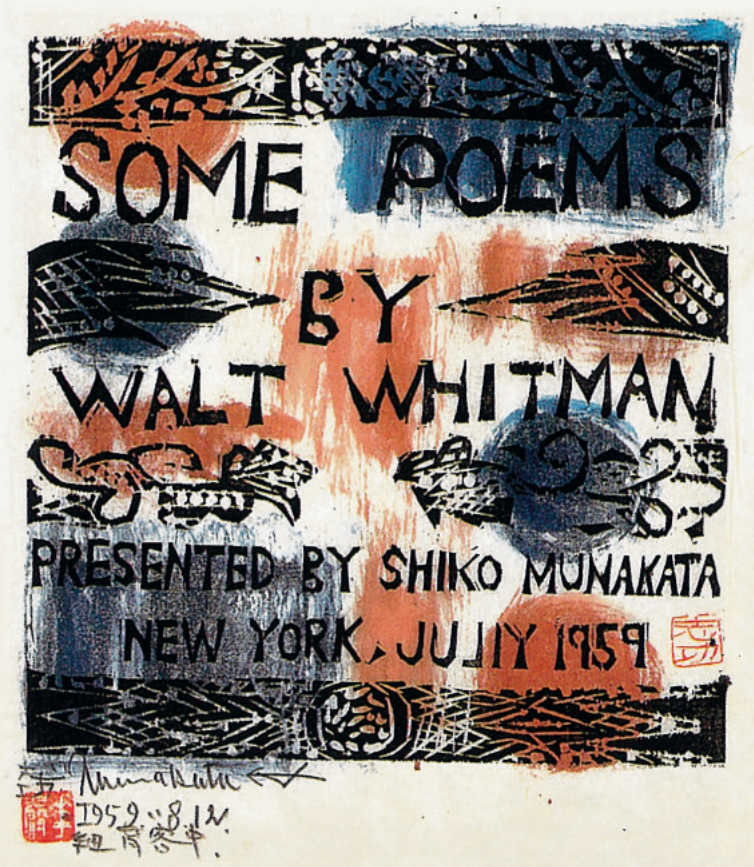
TAD Letter 21

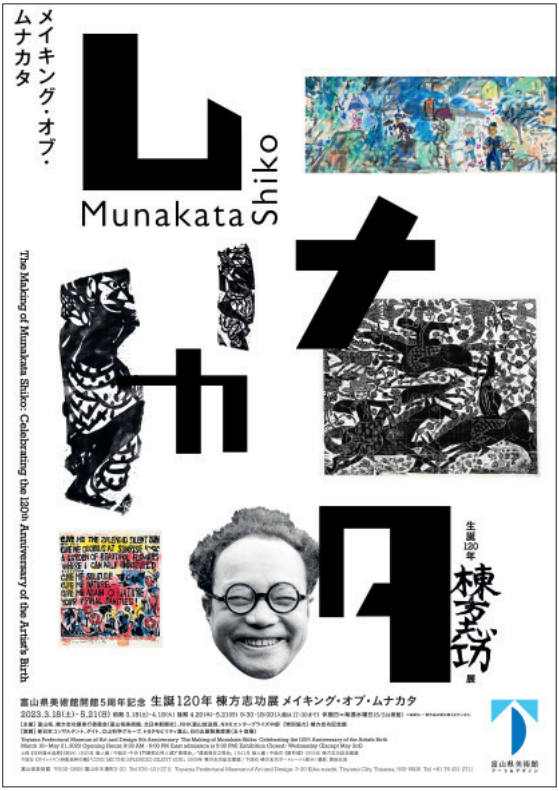
富山県美術館
アート＆デザイン



富山県美術館開館5周年記念

生誕120年 棟方志功展 メイキング・オブ・ムナカタ

2023年3月18日（土）- 5月21日（日）



ポスタービジュアル　Design：永井裕明

「世界のムナカタ」として国際的な評価を得た版画家・棟方志功（1903-1975）の作品は、今なお根強い人気を誇ります。一心不乱に板木に向かう棟方の姿は、多くの人々の記憶に刻み込まれているのではないでしょうか。棟方が居住し、あるいは創作の拠点とした青森、東京、富山の3つの地域は、それぞれに芸術家としての棟方の形成に大きな影響を与えました。福光町（現南砺市）には、1945年4月に疎開し、6年8カ月の期間をこの地で過ごしています。棟方の福光疎開については、県内ではご存知の方も多いかもしれませんが、版画や倭画（肉筆画）の重要作を制作し、創作活動の転機となったことはあまり知られてはいません。

棟方の生誕120年を記念して、各地域の美術館（当館、青森県立美術館、東京国立近代美術館）が協力して開催する本展では、棟方と各地域の関わりを軸に、棟方の多岐に渡る活動を紹介し、棟方志功とはいかなる芸術家であったのかを再考します。

棟方は1942年以降、自身の版画を「板画」と記すようになりました。これには、「板の生まれた性質を大事に」扱うという思いが込められており、自身の作品が一般的な版画とは別物であるという意識を抱いていたことを示しています。棟方の板画には、私たちが思い浮かべる版画を逸脱、超越する作品が少なくなく、横幅約13メートルに及ぶ《大世界の柵》（棟方志功記念館蔵）などの超大作は、本展の大きな見どころの1つです。棟方は板画、倭画、油彩画といった様々な領域を横断しながら、本の装丁や挿絵、包装紙などのデザインの仕事も数多く行いました。本展では棟方が手掛けた貴重な装丁本も数多く展示し、棟方のデザイン感覚や、時代や人との関りも紹介します。

開催概要

開館時間　9:30 -18:00（入館は17:30まで）
休 館 日　毎週水曜日（5/3は開館）
会　　場　富山県美術館2階　展示室2、3、4
主　　催　富山県、棟方志功展実行委員会（富山県美術館、北日本新聞社）、NHK富山放送局、NHKエンタープライズ中部
協　　賛　DNP大日本印刷／新日本コンサルタント、ダイト、立山科学グループ、トヨタモビリティ富山、日の出屋製菓産業（五十音順）
特別協力　棟方志功記念館
観 覧 料　一般1,500（1,200）円、大学生1,000（800）円、高校生以下無料　※（　）内は20名以上の団体料金

イベント情報

会期中のイベントの詳細は、当館ホームページやSNS等でお知らせします。

見どころと出品作品

左上から順に:《八甲田山麓図》1924(大正13)年 青森県立美術館蔵
《二菩薩釈迦十大弟子》「舎利弗」1939(昭和14)年/1948(昭和23)年改刻 東京国立近代美術館蔵
《瞞着川板畫巻》1950(昭和25)年 個人蔵 《飛神の柵》1968(昭和43)年 棟方志功記念館蔵
《大印度の花の柵》1972(昭和47)年 青森県立美術館蔵

展覧会構成

プロローグ 出発地・青森 1903−1924

1903年、青森市で鍛冶屋の息子として生まれた棟方志功は、独学で絵を描き始め、『白樺』掲載のゴッホの『ひまわり』の口絵に感動し、油画家の道を歩み始めました。青森では、友人たちと洋画グループ「青光画社」を結成、東京での帝展入選を目指して1924年に上京しました。

第1章 東京の青森人 1925−1945

棟方は1928年に帝展入選を果たしましたが、次第に版画へと活動の中心を移しました。1936年の国画会展で、民藝運動の主導者、柳宗悦の知遇を得たことで、仏教や日本文化への理解を深め、《二菩薩釈迦十大弟子》などの傑作を生みだしました。

第2章 暮らし・信仰・風土—富山・福光 1945−1951

1945年4月、棟方一家は福光町(現・南砺市)に疎開。戦中戦後の資材不足で版木が入手困難になり、倭画や書などの筆の仕事が増えました。また不揃いの木端を用いて制作した小さな板画は、「手摺・手彩色・手綴」の板画本に結実しています。

第3章 東京/青森の国際人

戦後は文学者との共働により国内的な知名度を上げ、1956年にはヴェネツィアビエンナーレで国際版画大賞を受賞し、国際的な評価を高めました。公共建築に関わる仕事にも取りくみ、「青森のムナカタ」として青森をテーマとする作品も制作しました。

第4章 生き続けるムナカタ・イメージ

棟方は生涯にわたって膨大な自画像を残し、自叙伝を何冊も出版しています。また棟方は、土門拳をはじめとする写真家たちの被写体にもなりました。板を彫る棟方の姿は多くの人の記憶の中で共有され、今も生き続けています。

富山新聞創刊100年記念

「前衛」写真の精神:なんでもないものの変容

前期:6月3日(土)-6月27日(火)
後期:6月29日(木)-7月17日(月・祝)
※大幅な展示替えがあります。

瀧口修造・阿部展也・大辻清司・牛腸茂雄　2023年6月3日(土)- 7月17日(月・祝)

ポスタービジュアル　Design: 永井裕明

本展は、1930年代の「前衛写真」から80年代まで、富山県出身の詩人・美術評論家の瀧口修造(1903−79)の思想を受け脈々と引き継がれた前衛写真の精神とその魅力を、4人の作品や資料を中心にウジェーヌ・アジェ、マン・レイなど関連作家の作品を加えて紹介いたします。

日本の写真史における前衛写真は、シュルレアリスムと抽象主義の影響を受け、1930年代に台頭してきました。瀧口は、その推進に大きく寄与しましたが、写真の記録性を重視し、故意に実在を破壊、加工する技巧的表現に偏重しつつあった傾向に対して早くから警鐘を鳴らし、ストレート・フォトでもシュルレアリスム的な表現が可能であると主張しました。瀧口とともに1938年に「前衛写真協会」を立ち上げた阿部展也(のぶや)(1913−71)は瀧口に共鳴し、ともに『フォトタイムス』誌などに作品や評論を発表し、精力的な活動を展開しました。

その頃中学生だった大辻清司(1923−2001)は、瀧口や阿部に多大な影響を受けて写真家を志します。そして、1950年代から造型的な写真を発表しますが、やがてオートマティスムの手法を採用したスナップショット的な「なんでもない写真」へと変化を遂げていきました。その大辻に見出され、写真の才能を見事に開花させたのが、牛腸茂雄(ごちょう)(1946−83)です。牛腸は日常における「自己と他者」をみつめ、技巧に凝らず誇張なしに撮影した「コンポラ写真」の代表的な1人として注目されました。

開催概要

開館時間	9:30 -18:00(入館は17:30まで)
休 館 日	毎週水曜日
会　　場	富山県美術館2階　展示室2、3、4
主　　催	富山県美術館、富山新聞社、北國新聞社、チューリップテレビ
協　　賛	塩谷建設、トヨタモビリティ富山(五十音順)
特別協力	武蔵野美術大学 美術館・図書館
企画協力	株式会社アートインプレッション
観 覧 料	一般900(700)円、大学生450(350)円、高校生以下無料、一般前売り700円 ※(　)内は20名以上の団体料金

イベント情報

会期中のイベントの詳細は、当館ホームページやSNS等でお知らせします。

見どころと出品作品

左上《瀧口たきの写真》1916年頃 瀧口修造撮影 個人蔵

瀧口が中学の頃、父の形見の高級カメラと交換したコダックのカメラで、縫いものをする母親を電燈の下で写した写真です。彼が文学や絵画に専念する前から、写真術を通じて実験的な精神が培われていたことを示す唯一の貴重な資料といえます。

左下『フォトタイムス』1938年5月号表紙 写真:阿部芳文(展也)

一見、造られたのか拾ってきたのか、意図も用途もわからない不思議な物。こうした「オブジェ」の精神を表現するのに写真が最適であるとした瀧口修造の主張を、阿部は強烈なインパクトの写真で見事に体現しています。

右上《瀧口修造夫妻、書斎にて》1975(2003)年 大辻清司(鈴木秀ヲプリント) 当館蔵

モノに囲まれた深夜の書斎で、カメラを向いた瀧口夫妻の表情を捉えています。私淑する瀧口の実験精神を受け継ぎ写真表現を追究する大辻が、1975年に発表した「大辻清司実験室」のために撮った1枚であるとともに、私的な交友録・記念写真でもあります。

右下《SELF AND OTHERS》1977年 牛腸茂雄(前期のみ展示)
新潟県立近代美術館・万代島美術館蔵

こわばった顔をした双子の姉妹。写真の側から見つめられているような、不思議な感覚に魂が揺さぶられます。カメラの向こうの牛腸と2人の感情の交叉を想像すると、「自己と他者」というテーマが強烈に迫ってきます。何気ない日常を、誇張や強調をせずありのままの姿で撮る「コンポラ写真」の代表的存在の1人とされる牛腸の代表作の1点です。

イベント開催報告

「デザインスコープ」展 関連トークイベント（全9回）

デザインスコープ展会期中、本展出品作家やゲスト、本展の企画に携わった当館職員などによるトークイベントが全9回にわたって開催されました。イベントでは、これまで制作されてきた作品のお話や、本展出品作の構想段階から作品の制作・会場設営の際の試行錯誤、他の出品作家・作品へ抱いた感想まで様々なエピソードが語られました。
また、ポスターをはじめ、本展ビジュアルデザインを制作してくださった永井裕明さんは、「のぞく ふしぎ きづく ふしぎ」というサブタイトルづくりにも関わりながら、人に好奇心を抱かせ、「のぞく」という動作を誘う「穴」を開けるというアイデアを思いつき、ポスターやフライヤーも実際に穴の開いたデザインとなったというお話をされました。タイトルやキーワードが印刷物や会場のバナーなど展覧会全体のイメージを形作っていった過程を知ることのできるイベントとなりました。

12月10日（土） 鈴木康広 × 川上典李子（当館デザインディレクター）
12月17日（土） 狩野佑真 × 宮前義之（A-POC ABLE ISSEY MIYAKEデザイナー）
12月24日（土） we+（林登志也、安藤北斗） × 志村信裕
12月25日（日） 林 勇気 × 以倉 新（当館学芸課主幹）
1月14日（土） 永井裕明（グラフィックデザイナー、2022年度～富山県美術館ポスターデザイン） × 川上典李子
2月11日（土） 三澤 遥 × 武井祥平（nomena代表取締役、エンジニア）
2月18日（土） 岡崎智弘 × SPREAD（山田春奈、小林弘和）
2月19日（日） 中野信子（脳科学者） × 桐山登士樹（当館副館長）
3月4日（土） 桐山登士樹 × 川上典李子 ※敬称略

「デザインスコープ」展関連トークイベントは、富山県美術館公式YouTubeチャンネルにてアーカイブ配信しています。
※配信は予告なく終了する場合があります。一部、配信していない回があります。ご了承ください。

アーティスト@TAD 袴田京太朗「複製する（陰の彫刻）」

袴田京太朗《布袋と台座ー複製1、2》2012年

アーティスト@TADは、国内外で活躍するアーティストを富山県美術館（TAD）に招き、滞在制作や作品展示を行う企画です。公開制作やワークショップを通して、アーティストの制作手法や考え方を紹介するとともに、その成果を含む作品展示を1階のTAD ギャラリーほかで開催します。
2022年度は、彫刻家・袴田京太朗氏を招き、「複製する（陰の彫刻）」をテーマに作品展示を行います。また、富山県美術館が所蔵する小さな彫刻を3Dスキャンし、約10倍のサイズに巨大化する公開制作など、「複製すること」あるいは「本物／偽物」とは何かを問いかけます。

ギャラリー展示

2023年3月18日（土）ー5月28日（日）　会場: 1階TADギャラリー
入場無料

公開制作

2023年3月19日（日）ー26日（日）　会場: 2階ホワイエ
※制作後、作品は5月28日（日）まで展示予定です。

作品体験+レクチャー「からだにことばをきざむ」

日時: 2023年3月25日（土）13:30ー15:30　会場: 3階アトリエ
※申込受付は終了しています。

ワークショップ「美術館の絵を複製する」

日時: 2023年3月29日（水）13:30ー16:30　会場: 2階展示室
※申込受付は終了しています。

トークイベント

袴田京太朗 × 横山由季子（東京国立近代美術館研究員）
日時: 3月26日（日）14:00ー15:30（開場13:30）
会場: 3階ホール　聴講無料／申込不要
※当館公式YouTubeチャンネルでライブ配信します。
詳しくは当館HPをご覧ください。

《夜の汽車》ポール・デルヴォー

1947年　油彩、板　153.0×210.0cm

© Foundation Paul Delvaux, Sint-Idesbald-SABAM Belgium/ JASPAR 2023 E5055

夜の駅の待合室に、3人の似た顔をした女性たちが居る。彼女たちは、ほとんど無表情で虚空を見つめており、異質な雰囲気が漂っている。このアーモンド型の大きな瞳を持つ裸体の女性と汽車のモティーフは、デルヴォーの作品に繰り返し登場する。鏡像を正しく映し出さない鏡は、非現実世界へと私たちを誘っているかのようだ。

この作品に関して、デルヴォーは「退屈さ、悲しみ、倦怠感、そしてそれから逃れたいという欲求」を描こうとしたと言及している。彼は、1927年にギョーム画廊でデ・キリコの作品に出会い、沈黙や不在の表現に影響を受けた。汽車と裸体の女性たちという異質の組み合わせに魅了された彼の手法から、シュルレアリスムの画家として語られることもある。しかしながら、彼は既存の概念を破壊させるなどのシュルレアリスムの理論自体に賛同することはなかった。彼の人生を紐解くと、それぞれのモティーフは理論や構成上の必要によるというより、彼の個人的な背景に基づいているという方が的確だといえるのである。

描かれた女性たちのモデルは、デルヴォーが愛したタムである。32歳の時に生涯の伴侶となる彼女と出会うが、両親の反対により一度関係を絶たなければならなかった。この時期から、彼女の不在の埋め合わせのように膨大な数のタムの素描を残すとともに、絵に登場する理想の女性像を作り上げていった。

彼の想像力を掻き立てた重要なもう一つの要素は、1932年に見たスピッツネル博物館の展示だ。その入口には、解剖学的な蝋人形が横たわっており、機械装置により胸が持ち上げられる様子は、まるで呼吸をしているかのようであったという。それはブリュッセルでの日常の中に突如現れた異様な光景であり、彼は「眠れるヴィーナス」の不思議な美しさに取り憑かれた。

さらにデルヴォーは、鉄道の発達した19世紀末に生まれ、子供の頃から列車で国内を頻繁に旅しており、強い愛着を持っていた。汽車の奥に描かれる建物は、デルヴォーが実際に見ることができたベルギーの複数の駅舎の外観を参考にしており、彼の記憶のモティーフが散りばめられているといえるだろう。デルヴォーの作品は、彼自身も語るように彼の生活や人間関係の影響を強く反映しており、それは彼の内面的な世界を覗くことのできる窓なのである。

（学芸課学芸員　今井 菜緒）

富山県美術館（TAD）
〒930-0806 富山県富山市木場町3−20（富岩運河環水公園内）　tel.076-431-2711　fax.076-431-2712　https://tad-toyama.jp/

表紙：棟方志功《ホイットマン詩集抜粋の柵》「Some Poems by Walt Withman」1959年 棟方志功記念館蔵　　2023年3月発行